



法人内事業所に家族で勤務する齋藤ファミリーに聞く！
入職したきっかけから様々な
出会いと別れ、これからの目
標について語る…

法人入職のきっかけ

菊地 那須共育学園に入職したきっかけを教えてください。

裕子 子供が小さい頃は子供を見ながら専業農家を営んでいて、一番下の娘が小学校に上がる時をきっかけに外で働いてみようと思いました。そんな時、自宅近くの那須共育学園で調理職員を募集しており、特に資格はなかったですが、食事を作るのが好きで、好きなことが仕事として出来たらいいなと思ひ、応募しました。働き始めて18年になりますが、毎日が楽しいです。**菊地** 知り合いの方で障害のある方はいたのですか。

裕子 私が2歳の頃に父が交通事故に遭い、脊髄を損傷して松葉杖をつく生活になりました。当時は福祉施設もなく、毎日松葉杖で近所の工場へ通っていました。私が10歳の時に父が亡くなってからは、母が農家をやりながら私たち兄弟3人を頑張り育ててくれました。その時母は、みんなに助けられた。だから自分が何かできる時はしてあげなさい。」とよく言っていました。なので、那須共育学園が近所にできると聞いたときは「いいのができるな」と、父のことなどが頭をよぎりました。

菊地 実際に働いてみてどうでしたか。那須共育学園では調理職員でも利用者に関わったり、一緒に食事をしたりすることもあるかと思いますが。

裕子 働く前は父のこともあり、上から目線ではないですが、障害者はいわゆるという同僚の気持ちしかありませんでした。実際に入職してみると、健常者と「一緒に働いて」という気持ちではなく、難しかった。同じ空間にいて、出来ないこと、難しいことは手伝うという感覚ですね。以前あった同情という気持ちではないですね。

菊地 人対人でお付き合いはできる、利用者さんと私という関係ですね。

裕子 今の職場の、癒される、穏やかに過ごしていく時間が好きです。子どもたちが小学生の頃、私が仕事から帰ると、今日は仕事どうだった？って子供たちが聞くんです。私は毎日楽しかったの、あったことを話していました。途中、家の仕事と重なり、休む時期もありました。嫁という立場もあり仕事を続けることは難しかったと考



聞き手
社会福祉法人 同愛会
理事長 菊地月香

えていた時、一将(長男)に言われたんです。お母さん、あそこ辞めないでね、続けた方がいいよって。それから続けてみようという気持ちになったんです。

菊地 なるほど。息子の後押しがあつて、その言葉が支えになったんですね。

裕子 勤務時間も融通を利かせてくれて、楽しく続けさせてもらっています。

一将 人と関わった仕事が目指すきっかけは何だったのですか。

障害者とはどういう人なのか分からなかった半面、興味があつて、更に母親の楽しい話を聞いていたので、障害者と関わる仕事は楽しそうだと単純に思いました。そこから福祉の大学に進学し、実習も那須共育学園に行きました。実習を通して、母の言う通り、利用者さんと関わるのは楽しいなと思ひ、那須共育学園に入職しようと思ひました。

菊地 お母さんは息子さんが実習に行くとか、働く聞いてどう思いましたか。

裕子 福祉の仕事が出来るか出来ないかは別として、向いていると思っていたので嬉しかったです。

菊地 実際に息子さんが実習や仕事をすることをどのように感じていましたか。

裕子 単純な言い方ですけど嬉しいですね。仕事内容は細かいことは言わないですけど、共感できるし、行事があることも何となくわかるし、頑張っているなつて。

菊地 一将さんを見ていると楽しそうですよ。

恭巳 私も小さい頃から人と関わる仕事があったと思つています。初めは教員になりましたが、福祉にもあり、教員の免許を取得でき、福祉も学べる大学に進学しました。大学で勉強していく中で、教員か福祉かとなった時に、福祉の興味が勝つたので福祉コースを選択しました。社会福祉士の資格を取得するための実習では、知的障害の方とコミュニケーションがうまく取れず、挨拶をしたり話しかけたりしても返してくれない方がいて、24日間の実習期間の中で、2週間程で初めて挨拶を返してくれた時に嬉しかったです。



那須共育学園
齋藤恭巳さん(長男妻)
那須共育学園
齋藤一将さん(長男)
かねだの里
齋藤直裕さん(次男)
レス・ピット
齋藤裕子さん(母)

その時感じたりやりがいや将来の仕事にしたいと思ひました。那須共育学園に入職を決めたのは、就職フェアに参加してブースで様々な話を聞いたことと、自宅から近く、自分の出身校の先輩が多く在籍していたことがきっかけです。

菊地 実際に働いてみてどうでしたか。

恭巳 自分がイメージしていた障害者は身体的に重度の方でした。実際、那須共育学園は活発な方が多いです。関わりが思ったようにいかない利用者さんでも、最初は戸惑うこともありましたが、外出や旅行に行くことで少しずつ利用者さんとの関係性が築けてきて、今は入職時とは比べ物にならないくらい話もできるようになりました。悩んだり試行錯誤したりして今があるので、今となってはいい思い出です。

菊地 色々な苦労を乗り越えて今では女性職員の中心ですからね。そして仕事をやる中で一将さんと出会い、昨年ご結婚されたんですね。お母さんどうでしたか。



裕子 嬉しかったです。仕事が好きだからお互い共感できたのだと思ひます。同じものに共感できる人が来てくれる、おまけにこんなかわいいお嫁さんで感謝しています。

菊地 自慢のお嫁さんですね。二人は結婚するにあたって同じ職場ということについて考えたり話したりしたのですか。それよりも上司にどう報告するかを考えましたか笑。

一将 付き合ってから結婚するまでに期間があつて、お互いのシフトのことも理解しあつた上だったので、抵抗はなかったです。同じ職場で大変な部分や楽しい部分で共感できていることで、結婚しやすかったのだと思ひます。

恭巳 夜勤もあります。勤務の仕組みや境遇などを分かっている相手なので家庭と仕事を両立しやすいと思います。

菊地 当法人の場合は保育園があるので、お子さんが生まれても安心なのかなと思ひます。

今後の目標

菊地 最後に今後の目標についてお聞きします。



直裕 関わっていた利用者さんが入院してしまつたのですが、面会する機会があるので、病室でやることがないとのことだったので塗り絵を提案しました。後日病室で塗り絵を一生懸命

やってくれていることを知って嬉しかったです。自分が関わったことで笑顔になった、変わったということの一つでも作っていくことが今の一番の目標です。

菊地 提案したものが利用者さんの楽しみになっていそうですね。そういう引き出して職員として大切ですよ。

恭巳 私は、利用者さんの現象に目を向けるのではなくて、裏にある本心をくみ取れる職員になりたいとも思っています。また、先輩に色々なことを教えてもらつて今があるので、今度はそれを後輩に伝えることで、人材育成にも目を向けていきたいです。

菊地 人を作るということも重要な仕事ですからね。そういう気持ちを持つてくれることがありがたいですね。

一将 自分だけでなく、他の職員も含めてやりがいを増やしていけたらと思います。今までにないことを企画し、試行錯誤しながらも結果的に「よかった」と思えるような機会を後輩職員も巻き込みながら、みんなで楽しめる職場を作っていきたいです。菊地 失敗をしないと人は成長しないので、後輩の失敗も含めて成長に繋げられる副主任になって、先々は主任になって那須共育学園を引っ張つていってくれる人材になってもらえれば良いと思います。

お母さんは、皆さんの食事のニーズに伝えていきたいです。また、利用者さんに声をかけると笑顔になつてくれるので、合間に少しずつでも声をかけて会話を楽しんできたいです。平和な空気が好きなので、これからもその雰囲気が続いてくれればと願っています。



菊地 この仕事は対利用者さんなので、個性をいかに伸ばしていくか、そこにどう関わつていくのかが大切ですね。元々おじいちゃん、おばあちゃん子だったんですね。直裕 おじいちゃんとお釣りに行ったり、訳も分からず朝早く起こされて山に連れていかれたりはいしよっちゅうありました。農家の仕事も好きだったのでおばあちゃんとお接することも多かったです。



仕事のやりがいとは

菊地 仕事のやりがいをを感じる時はどんな時ですか。

裕子 何気ない「ありがとう」「ごちそうさま」「ごはん残してごめんね」などの言葉がありがたいです。利用者さんも職員さんもみんな優しいし、あの空間にいるのがありがたいです。仕事に行きたくないということがないです。利用者さんが献立を聞いてくれるだけで嬉しいし、利用者さんと過ごす日常が楽しい好きです。

菊地 直裕さんは、

直裕 自分と会つた瞬間に笑顔になつてくれる利用者さんがいることに一番やりがいを感じます。自分がいない時に今日はいないのかと、残念そうにされているという話を聞いたりするので、自分がいることで施設に来たやつて思つてくれることが嬉しいです。菊地 確かに利用者さんの笑顔はパワーを与えますね。

恭巳 人を相手している仕事なのでうまくいくことばかりではないですが、だからこそ仕事として面白さがあると思います。その人それぞれに何が一番いいのかということを考えて支援をすることって、何がゴールなのか自分ではわからないし、ゴールはないのかもしれないが、常に自分も学んで探求心をもって働けることが福祉の魅力、やりがいなのかなと思います。利用者さんの笑顔も魅力的で、外出や旅行を一緒に経験して、感動を共有できる場所にもやりがいを感じます。

菊地 一将さんはどうですか。

一将 10年ぐらいい働かせていただいているんですが、利用者の生活の一部になれてきたように感じます。旅行や外出の企画をして、今までに利用者さんも自分も行ったことのない旅行先の企画に取り組むことはワクワクします。失敗や楽しみを利用者さんと共有できる場所にもやりがいを感じます。

直裕さんがこのお仕事に就こうと思つたきっかけは何ですか。

直裕 おじいちゃんおばあちゃんや障害のある方に自然と惹かれていました。私が小さい頃、どこかの店で障害者が車椅子に乗つて募金活動をしていました。その姿を見て感じた「何かしてあげたいけど、どうしたらいいかわからない」という気持ちはずつと頭の隅に残っていました。また、母の職場での話を毎日聞いていたので、楽しそうだなって思っていました。

法人で働かせてもらう前にある中学校の支援学級に勤めていました。契約期間の問題もあり一度離れましたが、母からも福祉の仕事が合っているんじゃないかという助言があり、福祉の道に進んでみようと思いました。

菊地 お母さんはどうでしたか。

裕子 嬉しかったですよ。福祉の仕事は向いていると思つていたので。支援学級の仕事は大変だったけど楽しそうにやつていましたし、やっぱり人が好きなんだなと思つていました。

菊地 直裕さんは利用者さんにかわいがられていて、穏やかな雰囲気です。お兄さんは弟が同じ法人で仕事をする

と聞いてどうでしたか。

一将 私の勤める法人で安心感もあるし、いいんじゃないかと思いました。家族3人で働いていじられるのは覚悟してました(笑)。



菊地 自分の職場や法人が「ちよつとな」と思つていたら止めますが、誰も止める人がいないっていうのは、私たち一緒に働いている者としては嬉しいしありがたいなと思つています。

裕子 おまけにうちのおじいちゃんとおばあちゃんも法人内の事業所でお世話になつています。関係ないのは主人だけねって言つたら、「いや、那須共育学園を造る時基礎づくりに行つたんだよ、おれも関わつていたんだ」つて笑つてました。

菊地 直裕さん、実際にかねだの里で働いてみてどうですか。

直裕 気づいたら1年が経ちびつくりしますね。最初は「助けてあげる」という気持ちがあつたんですが、今はできることを維持し、更に生きがいを感じてもらうにはどうしたらいいかなつて一日中考えています。自分というから笑顔でいてくれる利用者さんも少なからずいてくれて、深い部分で考えられるようになったことが一番大きいかもしれませんね。